ちょっと名大史

246

「名大祭休講」の変遷

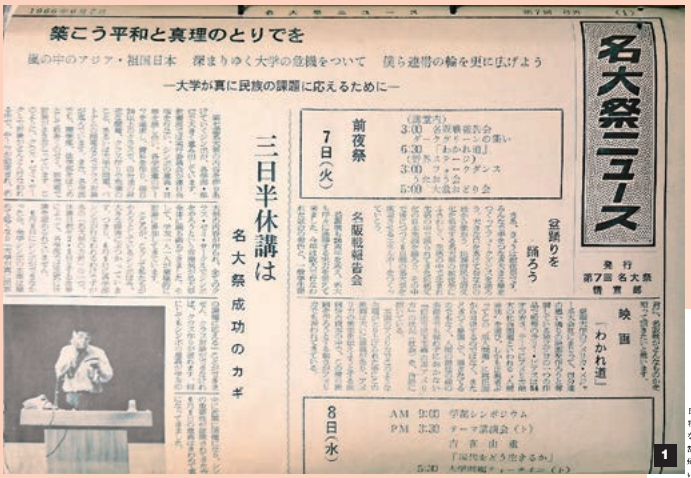
今年の第65回名大祭は、6月6日（木）の午後から9日（日）にかけて開催されました。例年この週は、木曜日の午後から金曜日まで、1日半が休講となります。今回はこの名大祭による休講の変遷を追ってみましょう。

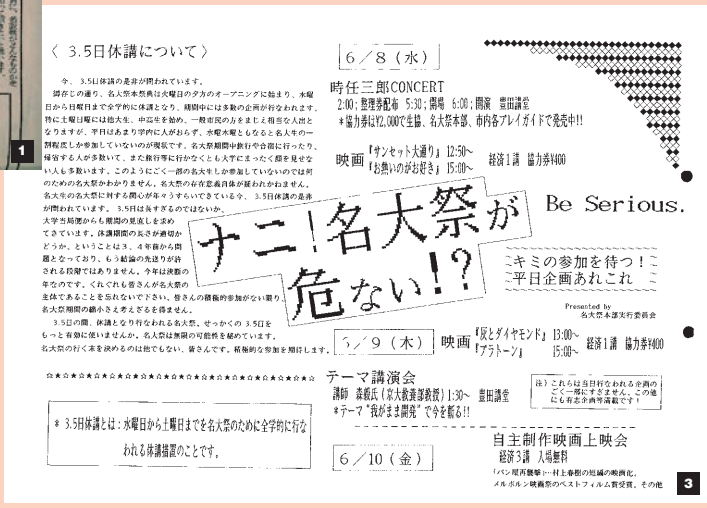
1960（昭和35）年の第1回名大祭は4日間行われ（うち平日の1日は体育祭）、当時は土曜日の午前は講義があったため、いわゆる「2.5日休講」でした。第2回以降も4日開催で2.5日休講でしたが、体育祭が別の週の日曜日に移され、実質的には休講日が1日増えています。

学生たち（名大祭実行委員会）は休講日のさらなる拡大を大学側に強く要望し、第5回では特例措置として3.5日休講が認められました。しかし第6回から再び2.5日休講に戻されると、休講日を伴う日程を「本祭典」と位置づけながら、その他の平日の夕方以降や休日にもイベントを行いつつ、引き続き休講日の拡大を要求しました。そして遂に第10回では、水曜日から土曜日の午前までの休講を実現します。これ以後、この3.5日休講（5日開催）が20年近く続くことになりました。

しかし、1980年代半ば頃から、名大祭に参加する名大生が少ないことが問題視されるようになりました。1988年には、名大祭本部実行委員会が名大祭短縮の危機を訴える緊急提言を行っています（写真3）。実際、翌1989（平成元）年の第30回からは、休講が水曜日の午後からに短縮され、3.0日休講（4日半開催）とされました。そして第34回（1993年）からは、週休2日制の導入で土曜日午前の講義がなくなったことに伴い、2.5日休講となりました。

その後も、名大祭本部実行委員会は名大生の参加を促進するべく尽力しましたが、第45回（2004年）からはさらに休講期間が短縮され、1.5日休講（3日半開催）となって現在に至ります。ただ、今年は大学側の事情により、木曜日の午前も休講になりました。





1 『名大祭ニュース』1966年6月7日付号外。「三日半休講は名大祭成功のカギ」として、各学部のシンポジウムが行われる水曜日が正式な休講日になっていないと訴えている。

2 3.5日休講が認められた第10回名大祭のプログラムの表紙。この年は、6月4日（水）から8日（日）までの5日間にわたって行われた。

3 1988年の実行委による緊急提言のビラ（コピー）。この年、大学側は実行委に対し、名大生の各企画への参加状況の調査を義務づけ、参加者数の増加が認められない場合、次回の休講日数を減らす旨を通告していた。

BRIEF HISTORY OF NAGOYA UNIVERSITY

名古屋大学の卒業生、
現役・退職後の教職員の方々へ

名大史をつむぐ資料を
大学文書資料室に！

■ **在学時の配布物**
（学生便覧、シラバス、試験問題、課外活動の資料…）

■ **教育・研究活動、大学・部局運営に関する資料**
（各種書類、会議のメモ、備忘録、スクラップ記事、写真…）

■ **校費による印刷物・刊行物**
（冊子、パンフレット、ポスター…）

■ **ご退職関係の記念冊子・記念論集・業績集…　　など**

※その他、ご処分予定の資料についても、まずは下記へご一報ください。

東海国立大学機構大学文書資料室
TEL 052-789-2046
Mail nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp